

## 成人期前期の日本男性の結婚観・仕事観

— インタビューおよび KJ 法・最適尺度法による —

白百合女子大学 加藤千恵子

白百合女子大学 柏木恵子

### *The Views on Marriage and Vocation of Japanese Male Young Adults By Interviews, KJ Method, and Optimal Scaling*

Shirayuri College KATO, Chieko

Shirayuri College KASHIWAGI, Keiko

本研究の目的は成人期前期の日本男性の結婚観と仕事観について探索的に検討することである。成人期前期の男性 25 人に結婚観と仕事観に関するインタビューを行い、その内容を KJ 法の思想を利用して整理した。その結果、結婚観も仕事観も多様化していることが示されたが、その多様化には違いが認められた。まず、結婚観に関しては、女らしさ以外の価値を女性に求める男性がいる一方、家事労働や育児を担ってくれる女性が理想であるといった伝統的な結婚観もかなり残っていた。また、男女平等といった社会的一般論を取り入れた意見を建前としている一方、本音では自分自身の家庭において伝統的性役割を担ってもらいたいという意見も聞かれるなど、結婚観の変化はまだ過渡期的状況であることがわかった。これに対し、仕事観では、収入や昇進以外にやりがいなどの価値を見出している者が多いなど、結婚観よりも保守的ではなくなっていることが示された。さらに、結婚観と仕事観の関係においては、仕事中心の人は伝統的な結婚観をもっているという傾向がみられ、仕事観が結婚観に影響を与えていることが示唆された。今後は、本研究の結果をもとに大標本による調査を行う予定である。

**【キーワード】**成人期前期の男性, 結婚観・仕事観, インタビュー, KJ 法, 最適尺度法

*The purpose of this study is to searchingly examine the change in the views towards marriage and vocation amongst Japanese male young adults. Data was gathered through interviews and classified using the KJ method that helps to emphasize minority views. The results showed that the Japanese young men had great diversity in their views towards marriage and vocation. However, this diversity of views tended to vary depending on marriage and vocation. On marriage, a few men responded that they expected roles other than their housekeeping role from their wives. Yet, the majority of the respondents expected a traditional housekeeping role from their wives. This could suggest that the Japanese young men's views on marriage are still in a state of transition. As for vocation, on the other hand, The comment of most of the respondents*

*was not traditional. For instance, they valued their motivation in their career more than their income and promotion. In other words, the Japanese young men's views tended to be more progressive towards vocation more than towards marriage. Moreover, there seemed to be relationships between the Japanese young men's views towards vocation and those towards marriage. The respondents whose primary concern was work tended to have traditional views on marriage, which suggests that their views on vocation would influence those on marriage. Further research will need to be done with a larger sample on the bases of the results of this study.*

【Key Words】*Japanese male young adults, Views on marriage and vocation, Interviews, KJ Method, Optimal Scaling*

## 問題と目的

わが国では、近年の社会的変化により、女性の価値観、とりわけ結婚観と仕事観が変化してきた。

これにはさまざまな要因が関与しているが、その中でも影響の大きいものとしては、家制度の崩壊（盛山，2000；中村，1994）、長寿命化と少子化を中核とする“人口革命”，工業化による家事の省力化などが挙げられる。このような変化が、女性の主婦役割，母親役割を時間的にも心理的にも縮小させてきたと考えられている（柏木，1998）。また，結婚観の変化では，女性が家庭以外にも価値を求めようになり，家族とは別の私的な心理的空間を重要視するようになった（柏木・永久，1999）。さらに，結婚を人生のゴールであるとは感じなくなり，それどころか逆に，有職女性の中には「結婚は家事を背負い込むだけでメリットがない」と考え，結婚生活を理想としない者が増加しつつあることが指摘されている（東・柏木，1999；鹿嶋，1993）。仕事観の変化についてみると，働くことがあたりまえであると考える女性が増加してきている（森永，1997）。

このように女性が変化しているにもかかわらず

らず，男性には女性ほど変化が現れていないようである。その原因として，第 1 に減らない実労働時間が挙げられる（東京都立労働研究所，1999）。たとえ家庭を大切にしたいと望んでも，仕事の量が多く，早く帰って家事や育児をすることができない。過労死という言葉が英語にもなってしまうような日本の労働体制が男性の変化を妨げていると思われる。「家族志向」の父親のストレスは，自分の時間や家族との時間の少なさである（矢澤，2000）ことから実労働時間の長さが示唆される。

男性の変化を拒む日本の労働体制があるにもかかわらず，男性の中にも結婚観が変化してきている人もいる。若い世代の男性ほど，女性の社会進出・男女平等を肯定的に評価していることが報告されている（盛山，2000）。また，内田（1994）は，家事を分担する夫が，必ずしも家事を否定的に捉えておらず，家事労働に積極的な意味づけをおこなっていることを明らかにしている。さらに，90年代に入ってから，子育ての前段階，つまり妊娠・出産から，第 1 段階である乳児の世話までをトータルなものとしてとらえ，その過程すべてに主体的にかかわってきた男性の体験手記が出版された。とくに 1992 年 4 月に施行されたばかりの育児休業法を利用

して休職したり、育児時間を取得するなどして、仕事と育児の折り合いをつけたサラリーマン男性たちの手記が数多く出版された。それまで「子育てする父親」が大学教員だったり、作家だったりと比較的時間の自由がきくとされる職種に限られていたのに対し、残業に追われる普通の企業人でも、その気になれば十分子育てに関わるということが示された(西川・荻野, 1999)。さらに、結婚制度から自由でいたい、シングルでいたいと望む男性も現れてきていることが指摘されている(海老原, 1986, 2000; 竹田, 2000)。

結婚観と同様、仕事観においても変化が生じている。メンズリブに代表されるように、従来の男らしさから解放されたいと望む男性が現れてきたことが示されている(伊藤公雄, 1993, 1996)。また、経済的役割を過度に重視する考え方に変化が見られるようになった。仕事に求めている価値は、従来、女性と男性では異なる。例えば、女性は男性より知的刺激や家族への配慮を重視しているとされてきた(Beutell & Brenner, 1986; 森永, 1993, 1997; Walker, Tausky & Oliver, 1982)が、東京商工会議所(1991)は、近年、男性も家族への配慮ができるような職場を選ぶ傾向があることを報告している。さらに、若年失業率は男子で10%を超えているが、自発的離職によるものの比率が最も高いという報告がある(労働省, 2000)。他の先進諸国と比べても若年失業におけるその比率の高さは特徴的である。いわゆる“フリーター”を自ら希望する男性やフリーターでいることに抵抗のない男性も現れている(日本労働研究機構, 2000)。また、壽里・北澤・桜井(1996)では、これまで男性は仕事志向の人が多く過半数を占めていたが、近年、仕事・余暇両立派が増えてその比率が仕事志向派に近づきつつある

ことが示された。

以上のように、日本では、社会的変化にともない、女性の結婚観と仕事観の変化に続き、一部の男性の結婚観と仕事観が変化してきていることが示唆される。このような一部の男性だけではない会社員など一般男性の結婚観と仕事観の変化についての実証的研究は必ずしも十分であるとはいえない。そこで、本研究では一般男性の結婚観と仕事観が変化しているのか、また変化しているならば、どのように変化しているのかをインタビューにより探索的に検討する。

また、成人期前期は、生活構造とその限界を知り、青年期を通して確立された価値観の再評価がなされ、生活がより現実的になるとされる時期であり(レヴィンソン・南, 1980)、さらに若い世代は価値観の変化が著しいという報告がある(望田・大西, 1992; 東京商工会議所, 1991; 東京女性財団, 1998)ことから、本研究では、20代半ばから30代半ばの成人期前期の男性を対象とした。

## 方 法

### 1. 調査対象者

成人期前期の男性 25 人。

### 2. 手続き

上述の研究目的に沿った調査対象者に事前に研究の目的と方法の説明をし、承諾を得た後に、インタビューを行った。なお、対象者として応じてくれたのは、著者の知人と、さらにその知人である。

インタビューは著者の1人(加藤)が行った。インタビューに先立って、年齢、最終学歴、職業、企業形態、転職経験、婚姻、妻の就業形態、子ども数、父親の最終学歴、母親の最終学歴について尋ね、インタビューでは比較的自由に結

婚観と仕事観を話してもらった。結婚観については、結婚に対して望むことなどを中心に、また、仕事観については、仕事の選定基準、職場環境に対する希望などを中心に尋ねた。インタビューの内容をテープに収めた場合には、その後逐語記録を作成し、テープに収めなかった場合には、内容はインタビュー時に著者により記録された。

インタビュー内容は、*KJ法* (川喜多, 1970) の思想を利用して整理した。この方法を用いたのは、*KJ法* がインタビューで得られた定性的データを整理するのに適していることと、少数意見を無視することなく結婚観と仕事観を捉えることができるからである。

インタビュー内容は次に示す 3 段階でまとめた。

(第 1 段階) 著者の 1 人 (加藤) が、結婚観と仕事観についてのインタビュー内容を 1 文ずつカードに転記した。なお、1 文に 2 つ以上の意味が含まれる場合には、複数のカードに分けた (このカードに書かれた内容は以下、エピソードとよぶ)。

(第 2 段階) 評定者 (心理学専攻の大学院生 2 名と筆者の 1 人 (加藤) の合計 3 名) の話し合いにより、結婚観と仕事観に関係しないと思われるエピソードを取り除いた。

(第 3 段階) 評定者 3 名の話し合いにより、最初にエピソードをいくつかのグループにまとめた。ここでまとめたものは、要素と呼ぶ。次に、要素をいくつかのグループにまとめた。ここでまとめられた要素はグループと名づけた。

また、対象者の要素に対する発言の有無をもとにデータマトリックスを作成し、その結果に対しては最適尺度法 (カテゴリカルデータの主成分分析) を用いて分析を行った。

### 3. 調査時期

調査時期は、2000 年 7 月初旬から 10 月中旬であった。

## 結果および考察

### 1. 調査対象者の属性

調査対象者の属性を、表 1 に示した。年齢、最終学歴、職業、企業形態、転職経験、婚姻、妻の就業形態、子ども数、最終学歴 (父親および母親)、それぞれの特徴的な点について述べる。なお、調査対象者の勤務先および住居はすべて東京である。

#### (1) 年齢

対象者の年齢は 25 歳から 36 歳までであった。平均は 31.16 歳であり、比較的多いのは 31 歳、33 歳の 6 名であった (図 1)。30 代は大学院卒であっても、社会に出てから 5 年はたっており、仕事観は学生時代とは変わってくる頃であるとされる (レヴィンソン, 1980)。また、結婚観に関しても適齢期と呼ばれる年齢を少し超えたくらいであるため、結婚をしないという選択肢も含め、結婚について考える時期ではないかと思われる。

#### (2) 最終学歴 (対象者)

対象者の最終学歴は、大学卒業以上を条件とした (表 2)。高学歴者を調査対象としたのは、学歴が職業を規定する面があるため、より同じ条件のもとでの結婚観と仕事観の多様性を検証するためである。ただし、対象者 F は、有名私立大学に入学したが 2 年のときに自主退学している (表 1)。大学卒業以上ではないにもかかわらず、F を入れた理由は、F のインタビューの内容が少数意見を多く含んでいたからである。

#### (3) 職業、就業形態および転職経験

対象者の職業については、営業職が全体の半

数以上を占め、続いて研究職が全体の 20%を占めていた(表 3)。

次に対象者の企業形態を示した(表 4)。大手企業に勤務する対象者が 14 名と全体の半数以上で最も多かった一方、中小企業で勤務する対象者も 6 名いた。

最後に対象者の転職経験を表 5 に示した。転職経験者は 6 名であり、大半が中小企業に勤めている者であった(表 1)。

#### (4)婚姻、妻の就労形態および子ども数

半数以上の対象者は既婚者であった(図 3)。既婚者の妻は、無職、つまり専業主婦が多かった(図 4)。妻が専業主婦である対象者の多くが大手企業に勤めていた。一方、妻が常勤である者は 3 名と少なかった。妻が常勤である対象者もすべて大手企業に勤めていた。子どもがいる対象者は 6 名であった。6 名中、子どもが 1 名である対象者が 5 名を占めていた(表 1)。

表 1 対象者属性

	年齢	最終学歴 (対象者)	職業	企業形態	転職経験	婚姻	妻の 就業形態	子ども 数	最終学歴 (父親)	最終学歴 (母親)
A	28	大卒	事務職	中小企業	あり	未婚			中卒	専門卒
B	25	大卒	営業職	中小企業	なし	未婚			大卒	大卒
C	31	院卒	非常勤講師	大学	なし	未婚			高卒	高卒
D	27	大卒	営業職	大手企業	なし	未婚			大卒	大卒
E	25	大卒	公務員	役所	なし	未婚			中卒	高卒
F	36	大学中退	営業職	中小企業	あり	未婚			高卒	高卒
G	29	大卒	営業職	中小企業	あり	未婚			高卒	高卒
H	30	院卒	大学の助手	大学	なし	未婚			高卒	高卒
I	28	院卒	営業職	大手企業	なし	未婚			大卒	大卒
J	33	院卒	営業職	大手企業	なし	未婚			大卒	短大卒
K	31	大卒	その他	その他	あり	未婚			高卒	中卒
L	31	大卒	医師	病院	なし	既婚	学生		大卒	大卒
M	33	大卒	研究職	大手企業	なし	既婚	常勤		院卒	大卒
N	31	大卒	営業職	中小企業	あり	既婚	学生		大卒	短大卒
O	33	院卒	営業職	大手企業	なし	既婚	常勤		大卒	短大卒
P	35	院卒	研究職	大手企業	なし	既婚	無職		大卒	大卒
Q	35	院卒	研究職	大手企業	なし	既婚	常勤		高卒	中卒
R	35	院卒	研究職	大手企業	なし	既婚	無職		院卒	大卒
S	33	大卒	営業職	大手企業	なし	既婚	パート		大卒	高卒
T	32	大卒	営業職	大手企業	なし	既婚	無職	1名	高卒	高卒
U	30	大卒	営業職	大手企業	なし	既婚	無職	1名	高卒	高卒
V	31	院卒	営業職	大手企業	なし	既婚	無職	1名	高卒	高卒
W	33	大卒	経営者	中小企業	あり	既婚	無職	1名	大卒	大卒
X	33	大卒	営業職	大手企業	なし	既婚	無職	1名	高卒	高卒
Y	31	院卒	研究職	大手企業	なし	既婚	無職	2名	高卒	高卒

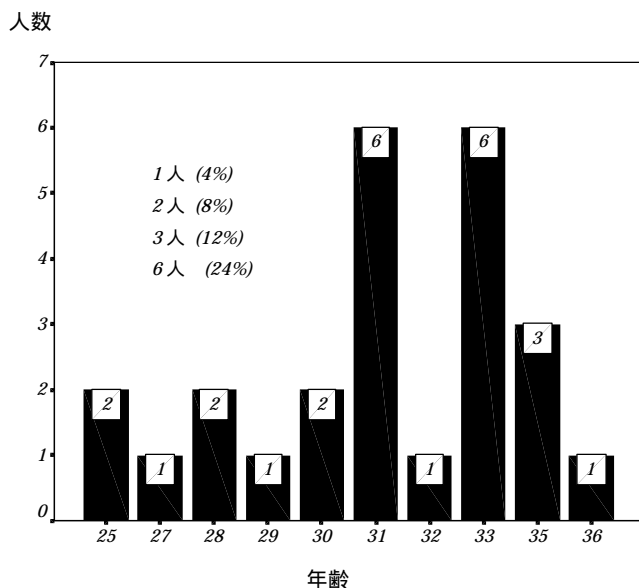


図1 年齢

表2 最終学歴(対象者)

	人数	パーセント
大学中退	1	(4%)
大卒	14	(56%)
院卒	10	(40%)

表3 職業

	人数	パーセント
研究職	5	(20%)
助手	1	(4%)
非常勤講師	1	(4%)
医師	1	(4%)
営業職	13	(52%)
事務職	1	(4%)
公務員	1	(4%)
経営者	1	(4%)
その他	1	(4%)

表4 企業形態

	人数	パーセント
大手企業	14	(56%)
中小企業	6	(24%)
大学	2	(8%)
病院	1	(4%)
役所	1	(4%)
その他	1	(4%)

表5 転職経験

	人数	パーセント
転職経験あり	6	(24%)
転職経験なし	19	(76%)

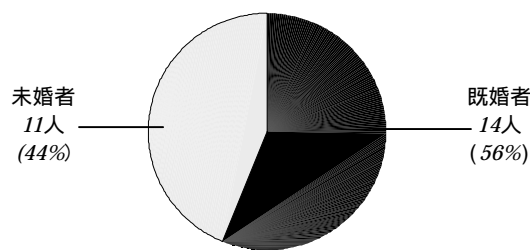


図3 婚姻

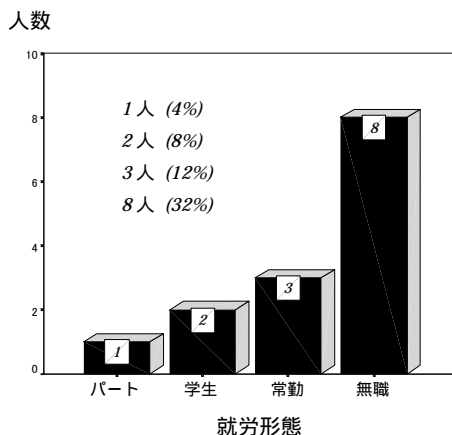


図4 妻の就労形態

表6 最終学歴（父親）

	人数	パーセント
中卒	2	(8%)
高卒	11	(44%)
大卒	10	(40%)
院卒	2	(8%)

表7 最終学歴（母親）

	人数	パーセント
中卒	2	(8%)
高卒	11	(44%)
大卒	8	(32%)
専門卒	1	(4%)
短大卒	3	(12%)

### (5)最終学歴（父親・母親）

対象者の父親の最終学歴についてであるが、大学卒業以上の学歴を有する者は約半数であった（表6）。また、母親の最終学歴は大卒、短大卒を合わせて、44%であった（表7）。

素に分類し、最終的に7グループにまとめた。

KJ法によって得られた結婚観に関する65エピソード20要素7グループのそれぞれの関係を図5、図6に示す。

## 2.結婚観と仕事観

### (1)結婚観

#### KJ法による分類

結婚観については、方法のところでも述べたKJ法に準拠し、まず関係すると思われる259文を選び、1枚のカードに1文ずつ転記した。次に、評定者がそのカードに書かれた259文を質的に類似しているもの同士でまとめた結果65のエピソードに分類された。なおこの際、どのエピソードにも属さない分類不能な文が37文あったが、これらは対象外とした。さらにその65エピソードを質的類似性により評定者が20要

また、結婚観についての各要素に含まれたエピソードに対する対象者の発言数を表8に示す。ここで表8中の対象者Bの第1要素に記された“3”を例に表8の見方を説明する。図5からわかるように、第1要素には4つのエピソードが含まれている。対象者Bはインタビューの中でこの4つのエピソードのうち、3つに対して発言をしたため、表8の第1要素の欄に“3”と記されているのである。

さらに、対象者を未婚者と既婚者に分けた場合と、研究職・教育職・医師と営業職・事務職・経営者・公務員・その他に分けた場合の各要素ごとのエピソード数の平均を図7、図8、図9、図10に示した。このような区別を行ったのは、

未婚であるか既婚であるか、また専門職か非専門職かにより結婚観に差異があると思われたからである。

KJ法により結婚観についてのインタビュー内容の分類を行った結果、グループごとに様々なエピソードがあり、また、同一グループ内の要素でも相反する内容となっているものもあることから、結婚観が多様であることが示された(図5, 図6)。また、各要素への反応も対象者により様々であることから、結婚観の多様性が浮き彫りになった(表8)。

以下、グループごとに結果を詳しく見ていく。

### 『シングルでいること』グループ

『シングルでいること』グループでは、第1要素『シングルでいたい』に対する意見が多かった。この結果は、女性のみならず男性もシングル志向になってきている(海老原, 1986, 2000; 竹田, 2000)ことを示唆していると思われる。家電製品の普及や調理済食品などの外部サービス化により、結婚というものに必要性を感じなくなってきている様相(東・柏木, 1999)を示していると思われる。また、家事労働は自分でできるので、家事労働を女性にやってもらうためだけに結婚する必要がなくなってきていると考えられる。例えば、インタビューの中で、Bは、「自分でなんでもできるし、結婚する必要はない。結婚は仕事のじゃまになる。」と述べていた。しかし、このような『積極的シングル』と名づけた対象者ばかりではなく、『消極的シングル』と名づけた対象者も第1要素『シングルでいたい』には含まれていた。例えば、Eは「結婚したくても相手がいらない。」と述べ、第10要素『伝統的性役割重視』には4エピソードに含まれるような話をしていた(表8)。結婚は家事労働を担うだけと考えるシングル志向の女性が増えている(東・柏木, 1999; 鹿嶋, 1993)ため、Eの

ように伝統的役割を重視してしまうと、結婚したくても相手がいらないということになってしまっているのではないかと考えられる。

### 『結婚』グループ

『結婚』グループでは、第4要素『結婚への後悔』が全エピソード25のうちの半数以上を占めていた。その理由として、自分の時間がなくなる、妻と合わないなどが挙げられていた。例えば「自分の時間がなくなる。」と述べていたXは、第5要素に含まれるような「仕事を一生懸命やりたい。」というような意見と第6要素に含まれるような「家族を大事にしたい。」という意見の両方を述べており(表8)、その両立のため、なかなか自分自身の時間をもつことができないのではないかと推察される。このような結果は矢澤(2000)を支持するものであると言える。逆に、『結婚して良かった』エピソードに意見を述べている対象者は、LとNの2名であった(表8)。Lは結婚して良かった理由として、「奥さんはわりと家事とか結構一生懸命やってくれる人だから。」と答えていた。一方、Nは、パートナーとして妻をみており、「いきいきと仕事をしている妻といることが楽しいから、結婚して良かった。」と述べていた。このように、「結婚して良かった」と感じる理由に伝統的結婚観とは異なる意見を挙げる者もあり、価値観が多様化していることが推察される。

### 『仕事と家庭のウエイト』グループ

『仕事と家庭のウエイト』グループでは、仕事中心という考え方は根強いが、第6要素『家族を重要視』への発言も多いことから家族を大切にしている様子がうかがえる。

ここで、既婚者と未婚者を比較してみると、既婚者の方が未婚者より第5要素『仕事中心』というエピソードへの発言が多いことがわかる(図7, 図8)。これは、対象者の妻の多くが専業



主婦や学生であるため、対象者が一家の稼ぎ手としての役割を担わなければならなくなり、その結果、会社中心になってしまっているためではないかと考えられる。または、会社中心にしていきたいために、妻は専業主婦であることを望んでいる可能性もある。

次に、職業による差異について検討していく。研究職・教育職・医師の方が、営業職・事務職・経営者・その他よりも、第5要素『仕事中心』に対する発言が多かった(図9, 図10)。研究職の対象者は大手企業に勤めている。大手企業で専門的な仕事を行うと、仕事中心になってしまう、またはならなくては勤めていけない可能性が示唆される。

### 『家族のあり方』グループ

『家族のあり方』グループでは、第7要素『家族の個人化』の中の『家族といっても別』エピソードに注目した。既婚者の方が未婚者より第7要素『家族の個人化』に対する発言が多かった(図7, 図8)。この結果より、結婚をすることで、家族の一員としてだけではなく自分をもちたいと望むことが多くなる可能性が示唆される。これは第4要素『結婚への後悔』の原因の1つが自分の時間がないことであることから推察される。

次に第8要素『親と子の共生』では、壽里・北澤・桜井(1996)が指摘する子離れできない親、親離れできない子の様子が見られる。

また、第9要素『コミュニケーションを大切に』からは、コミュニケーションをとることの重要性を自覚している対象者もいることが示唆される。これは、夫とコミュニケーションをとりたいと望んでいる妻の要求(難波, 1999)にこたえられうる意見であると思われる。

### 『伝統的性役割観』グループ

『伝統的性役割観』グループのエピソードは

結婚観についてのインタビューの中で最も多い。中でも第10要素『伝統的性役割重視』のエピソードに対しての発言数は46と多い。このことから、伝統的性役割について考える機会が結婚に際し増え、かつ問題になるのではないかと推測される。特に、子どもが小さいうちは専業主婦でいて欲しいと思っている対象者が目立つ。例えば、第10要素『伝統的性役割重視』に対して多く発言しているXは(表8)、「妻は子どもができたら絶対に専業主婦になってほしい。」と述べていた。実際Xの妻は、子どもができると仕事をやめ専業主婦になった。このような子どもができたら専業主婦になることを望む男性の存在は、女性の就労がM字型になる(盛山, 2000)ことから説明できる。また、第5要素『仕事中心』に対して発言している対象者の多くが第10要素に対して発言していることがわかる(表8)。このことから仕事中心の生活を行うためには、企業戦士を支える妻が必要であると考えられる。第11要素『家事は楽しい』からは、内田(1994)の指摘する家事にやりがいを感じている対象者がいることが示された。この結果は、男らしさからの解放を望んでいる男性の出現(伊藤公雄, 1993, 1996; 鈴木, 2000)を実証していると言える。例えば、Aは第11要素のどちらのエピソードのどちらに対しても発言しており(表8)、「自分は母親が働いていたため、家事は昔からやっており、苦にならないし、やりがいも感じる。好きなギターを家でゆっくり弾いていたりする時間ができるから、主夫が良い。」と述べていた。

ここで、『伝統的性役割観』グループにおいて、未婚者と既婚者による差異を検討していく(図7, 図8)。第11要素『家事は楽しい』に対する発言は既婚者の方がやや多い。これは実際に家事をやってみて始めて家事に対してやりがいを感じられるためではないかと思われる。

### 『妻・彼女に望むこと』グループ

『妻・彼女に望むこと』グループでは、伝統的性役割を望む意見はあまり見られなかった。つまり、男性が妻・彼女に望むものが、従来の伝統的性役割にもとづいた女らしさだけでなくなってきたことが示唆される。

また、第12要素『妻・彼女に仕事を』は、女性財団(2000)の「女性は働かない方が良い」という考え方を持っている男性が団塊世代以降の対象者全体の5%しかいないという結果からも示唆されるように、女性の社会進出に賛成している発言であると言える。

### 『子ども』グループ

『子ども』グループにおいては、第17要素『子どもはいらぬ』に注目した。子どもはいらぬという中には、既婚者も2名(P, Q)含まれていた(表8)。このように結婚しても子どもはもたないとする者もいた。

また、第19要素『子どもは自由に』とされている対象者は、未婚者に多かった(図7, 図8)。子どもをもつことが現実になると、子どもを自由に育てたいとは思えなくなる可能性があることが示唆された。

#### 最適尺度法による分析

要素間の関係を調べるために、表8にまとめた各要素に含まれたエピソードに対する対象者の発言数を最適尺度法を用いて解析し、要素の布置を行った結果を図11に示す。横軸を第1主成分、縦軸を第2主成分とした。固有値はそれぞれ3.64, 3.26, 寄与率はそれぞれ18.22%, 16.31%(累積寄与率34.53%)であった。

各要素の2次元布置から、各要素の類似性を検討する。20個の要素のうち、2つまたは3つで構成される群が5群できたが、残りの7つの要素はどの要素の近くにも布置されなかった。

まず、原点付近だが第1主成分の負方向に、第

15要素『妻・彼女の外見は気にしない』、第16要素『妻・彼女はパートナー』、第17要素『子どもはいらぬ』が布置された。妻または彼女に対して、パートナーのような関係、特にDINKSのような関係を望んでいる人も含む群にまとめられたことがわかる。次に、第1主成分、第2主成分ともに比較的高い負の負荷をもつ第6要素『家族を重要視』、第7要素『家族の個人化』、第11要素『家事は楽しい』は、すべて家族について述べているため、近くに布置されたと考えられる。第3に第2主成分に、高い負の負荷をもち、第1主成分にも比較的高い負の負荷をもつ位置に布置されている要素が第12要素『妻・彼女に仕事を』と第13要素『明るい人が好き』である。これらの要素は、『妻・彼女に望むこと』グループに含まれる。これらの要素は、女性に対して、従来の女らしさ以外のものを求めていることを示している。第4に、同じ『妻・彼女に望むこと』グループの第14要素『しっかりした女性が好き』は、第8要素『親と子の共生』と第18要素『個人的な子に』の近くに布置された。これらは第1主成分の正方向、第2主成分の負方向でまとまっている。これらの要素について発言しているのは、ほとんどが未婚者である(表1, 表8)。つまり未婚である対象者の生活、女性や子どもに望むことでまとまっていると言える。最後に、第1主成分に高い正の負荷をもち、第2主成分にわずかな負の負荷をもつのは、第2要素『シングルはいや』と第19要素『子どもは自由に』である。これらが近くに布置された理由としては、インタビューの中で結婚をしたいと望む人は結婚後の子どもの話をしていたからではないかと推察される。

( )はエピソード数を示す

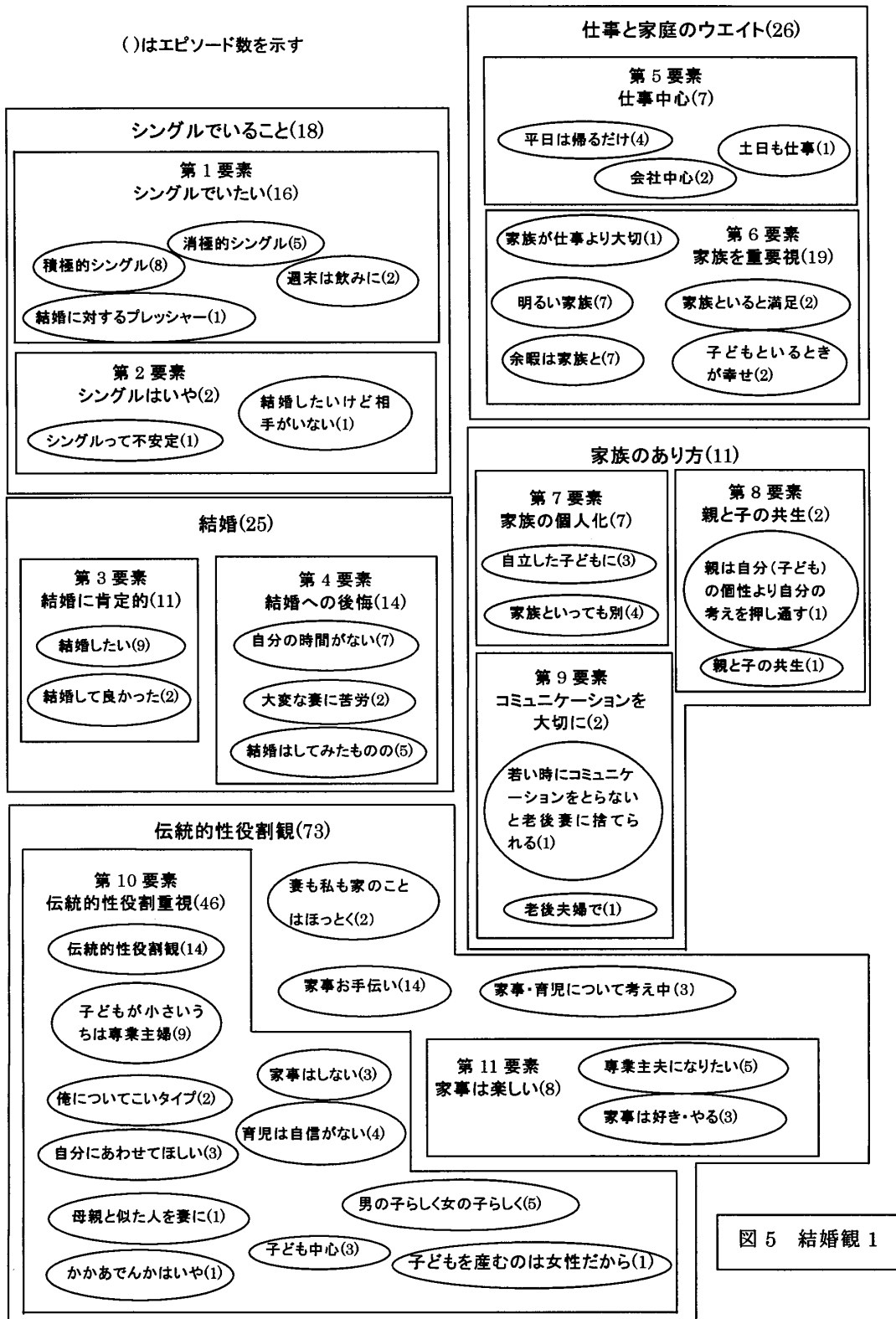


図5 結婚観 1

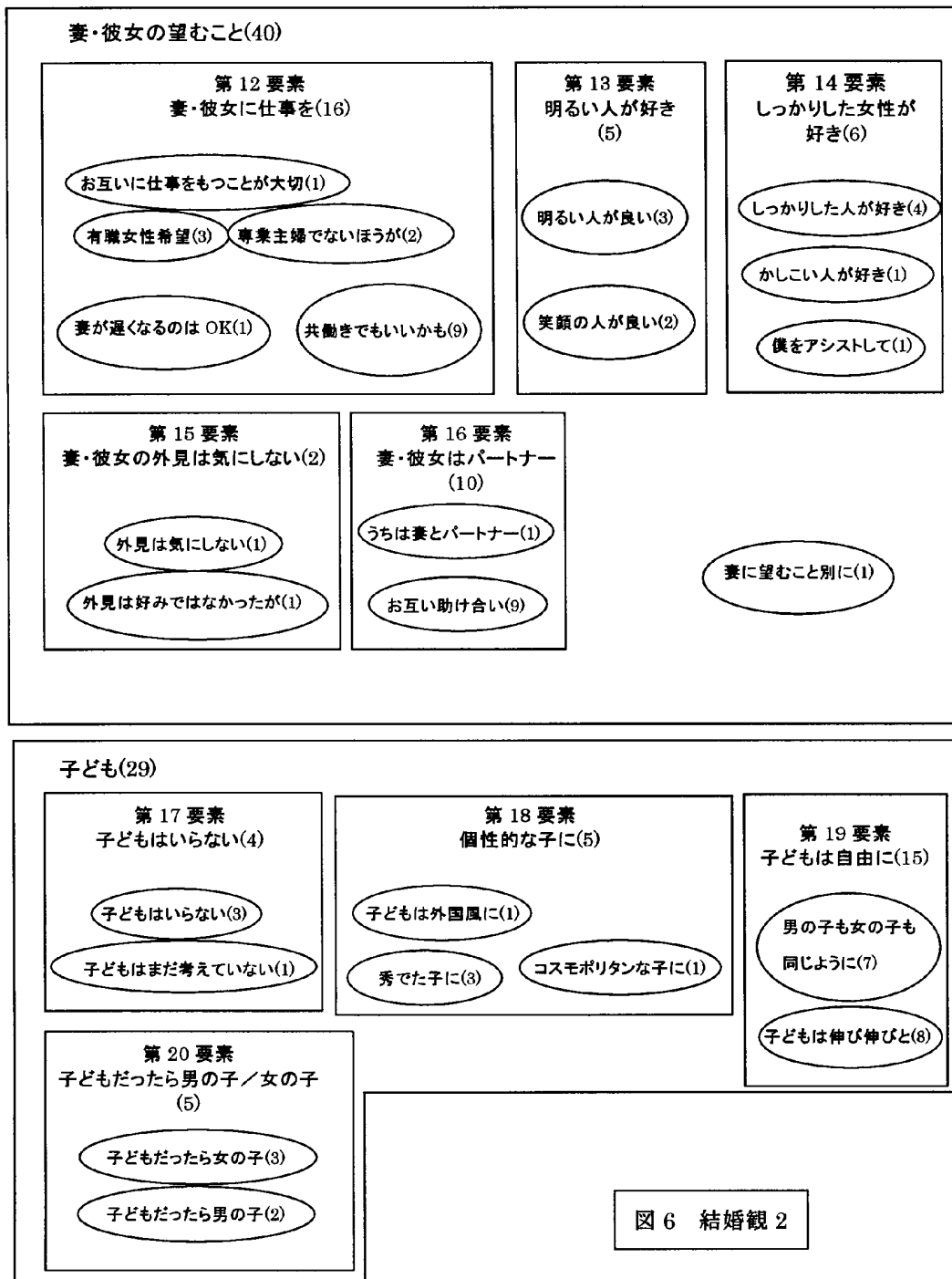


図 6 結婚観 2

表 8 結婚観についての対象者の各要素に含まれるエピソードに対する発言数

要素	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
A	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0
B	3	0	0	0	0	0	1	1	0	3	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0
C	2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	1	2	0
D	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	1	2	0
E	1	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	2	0	0	1	0	0	0	1	0
F	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
G	1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	0
H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
I	2	0	1	0	0	1	0	0	0	4	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0
J	2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1
K	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0
L	1	1	1	0	2	0	0	0	0	4	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0
M	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1
N	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	2	1	1	0	0	1	0	0	1	0
O	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1
P	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
Q	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0
R	0	0	1	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
S	0	0	0	2	1	0	1	0	0	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0
T	0	0	1	1	1	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
U	0	0	1	0	0	2	1	0	0	0	2	2	1	0	0	1	0	0	0	0
V	0	0	1	1	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
W	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
X	0	0	1	1	1	3	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Y	0	0	1	1	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	16	2	11	14	7	19	7	2	2	46	8	16	5	6	2	10	4	5	15	5

エピソードに対する発言数の平均

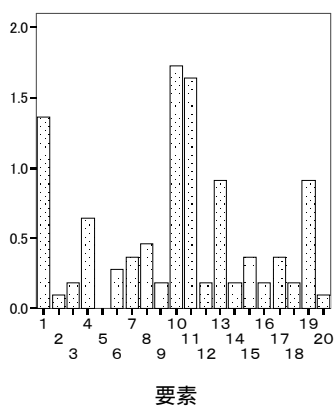


図 7 未婚者の結婚観に関する発言数の平均

エピソードに対する発言数の平均

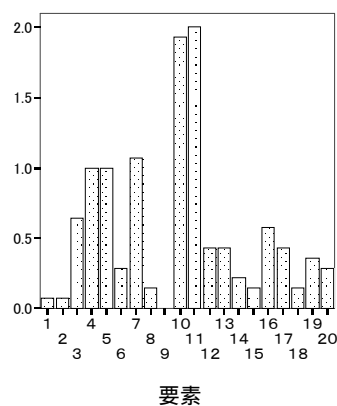


図 8 既婚者の結婚観に関する発言数の平均

エピソードに対する発言数の平均

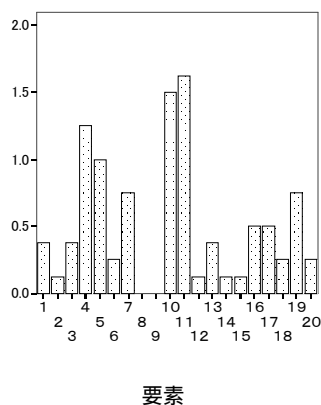


図 9 研究職・教育職・医師の結婚観に関する発言数の平均

エピソードに対する発言数の平均

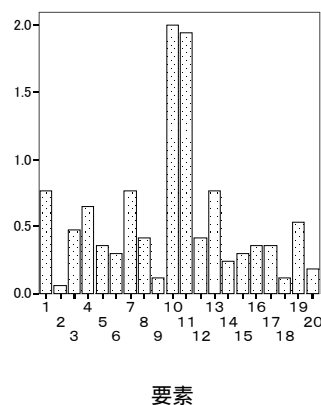


図 10 営業職・事務職・経営者・その他の結婚観に関する発言数の平均

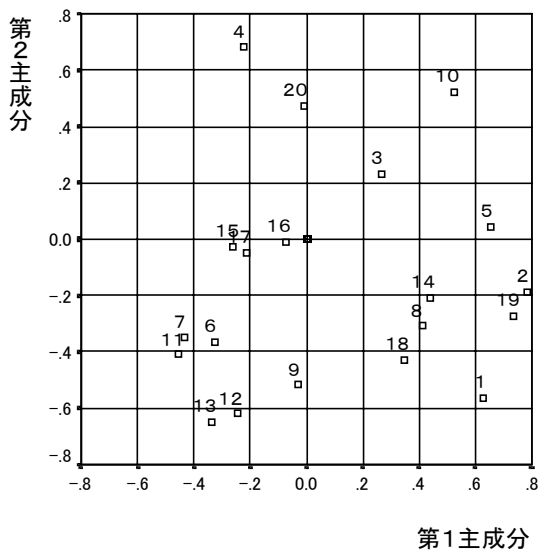


図 11 結婚観に関する要素の布置

第 1 要素『シングルでいたい』, 第 3 要素『結婚に肯定的』, 第 4 要素『結婚への後悔』, 第 5 要素『仕事中心』, 第 9 要素『コミュニケーションを大切に』, 第 10 要素『伝統的性役割重視』, 第 20 要素『子どもだったら男の子/女の子』は, それぞれ別々に布置された。

以上のような各要素の布置に関する検討結果から, 軸の解釈を行ったが, 軸には明確な解釈が成り立たなかった。これは結婚観に関して

個々人の考え方にばらつきがあるためではないかと思われる。

(2)仕事観

KJ法による分類

仕事観については, 結婚観と同様に, KJ法に準拠し, 仕事観に関係すると思われる 161 文を選び, それらをカードに転記した。分類作業は結婚観と同様で, 140 文のカードを 43 エピソードにまとめ, 分類不能となった 21 文は除かれた。

最終的に 43 エピソードを 12 要素に分類し、さらに評定者により 4 グループにまとめた。KJ 法によって得られた仕事観に関する 43 エピソード 12 要素 4 グループのそれぞれの関係を図 12、図 13 に示す。

また、仕事観についての各要素に含まれるエピソードに対する対象者の発言数を表 9 に示す。

さらに、結婚観同様、仕事観についても、対象者を未婚者と既婚者に分けた場合と、研究職・教育職・医師と営業職・事務職・経営者・公務員・その他に分けた場合の各要素ごとのエピソード数の平均を算出し、図 14、図 15、図 16、図 17 に示した。

仕事観に関するエピソード数は結婚観に比べ少なかった（図 12、図 13）。しかし、結婚観と同様、仕事観に対する反応も人により様々であったと言える（表 9）。

仕事観については、結婚観とは異なり、各グループが大きく 2 つのまとまりに分けられたため、布置はそれに沿って行っている。仕事観は、まず、保守的な考え方ではないエピソードを反映していると思われる『革新』グループと、保守的な考え方を反映していると思われる『保守』グループの 2 つの対照的なグループに分けられた。さらに、『革新』グループに近いグループとして『人に流されない』グループ、『保守』グループに近いグループとして『人に流される』グループというグループをそれぞれ布置し、大きく 2 つに分かれた形である。『人に流されない』グループを『革新』グループの近くに布置した理由は、親の仕事を継いだり、なんとなく大手の企業が良いというような気持ちではなく、自分のやりたいことという観点で仕事を選んでいられるからである。『人に流される』グループを『保守』グループの近くに布置したのは、自分の意思や自分のやりたいことよりも他者の

影響を受けて自分の職業を選定したり、他者のことを自分のやりたいことよりも優先していると考えられるからである。

また、第 1 要素『定年後好きなことを』は、『革新』グループ、『人に流される』グループ、『保守』グループ、『人に流されない』グループのどれにも属さなかった。なぜなら、現在、仕事が多忙であるため何もできず老後は好きな事をしようと思っている対象者もいれば、現在も何もできないというほど働いておらず、将来はさらに好きなことをしたいと思っている対象者がいると考えられるからである。

以下、グループごとに結果を詳しく見ていき、最後にどのグループにも属さなかった第 1 要素『定年後は好きなことを』について述べる。

### 『革新』グループ

『革新』グループの中では、第 2 要素『女性の社会進出賛成』に対する意見が多かった。既婚者の方が未婚者より第 2 要素に対しての発言が多かった（図 14、図 15）。妻が常勤である対象者はすべて（M、O、Q）第 2 要素『女性の社会進出賛成』に対して発言していた。妻が常勤でいるためには、夫の理解が重要であることが示唆される。

第 3 要素『リストラもしょうがない』では、『リストラされたら転職』エピソードが含まれていた。このように終身雇用の観念にとらわれず、今の時代はリストラもありうると考えていることが示唆された。その例として U は、子どもが生まれてからは育児のために残業を減らし家に戻っているため、リストラされるかもしれないが、それもしょうがないとしていた。

また、第 4 要素『フリーランス OK』からわかるように、定職につかなくてもかまわない対象者もいることがわかる。さらに、第 5 要素『転職 OK』からは、転職に対して抵抗がなくなっ

ている対象者がいることも示唆される。第 4 要素『フリーランス OK』と第 5 要素『転職 OK』のどちらに対しても意見を述べている K は、転職経験があり、以前は大手企業に勤めていた。しかし自分の好きなことができないと思い転職しているが、そのときには「仕事を変えることには何のためらいもなかった。」と述べている。第 4 要素『フリーランス OK』、第 5 要素『転職 OK』に発言しているのは、未婚者の方が既婚者よりも多く（図 14、図 15）、結婚すると、転職をしたり、定職につかないという選択が家族を養うということを考えると難しくなるという可能性が示唆される。また、研究職・教育職・医師の方が、営業職・事務職・経営者より、第 4 要素『フリーランス OK』への発言が多く（図 16、図 17）、フリーランスに賛成しているが、これは、前者が専門職であるため、自由契約や定職につかない生き方を選びやすいためではないかと思われる。

### 『人に流されない』グループ

『人に流されない』グループには、第 10 要素『やりたいことが決まっている』と、第 11 要素『自分のペースで働きたい』が含まれている。これまで、女性は男性よりも収入や昇進以外に職場の条件や知的好奇心を満たすことなどを求めることが明らかになってきたが（Beutell & Brenner, 1986 ; 森永, 1993 ; Walker, Tausky & Oliver, 1982 ）、男性も収入や昇進以外の要因を仕事に求めていることが東京商工会議所（1991）同様、本研究でも示された。また、『専門が生かせるから』エピソードや『自分が主体的になって働きたい』エピソードの背景には望田・大西（1992）の指摘する仕事が個性化してきた可能性が考えられる。

第 11 要素『自分のペースで働きたい』では、既婚者の方が未婚者より多くの意見を述べてい

た（図 14、図 15）。

また、研究職・教育職・医師の方が、営業職・事務職・経営者より、自分のペースで働きたいと思っている（図 16、図 17）。これは、研究などは、自分のペースで行うことが多いためかもしれない。

### 『保守』グループ

『保守』グループには、第 6 要素『人生仕事』、第 7 要素『リストラ反対派』、第 8 要素『フリーター反対』そして第 9 要素『転職はしない』が含まれている。どの要素も現代の日本社会の変化を考えると、保守的な考え方とされるものである。

まず、第 6 要素『人生仕事』に発言した対象者の人生は仕事を中心であり、定年後もはたらくつもりでいる者が多い。第 6 要素『人生仕事』に多く発言している W は、自分で企業を立ち上げた IT 関連の中小企業の社長で、既婚、子どももいるが毎日仕事以外はほとんど何もできず、土日も働いている。表 8 からわかるように、W は結婚観において伝統的な価値観をもっており、「家事はいいさいない。」と述べ、今は自分の会社を成功させることにすべてをかけていた。このような対象者が、東・柏木（1999）が指摘するように、仕事をするのが妻のためであると考え、家庭をかえりみず、妻が求めている伴侶性を失ってしまうのではないだろうか。

また、第 8 要素『フリーター反対』、第 9 要素『転職はしない』では、終身雇用を希望し、フリーターの就業形態に反対であることがうかがえる。そのため、第 8 または第 9 要素に発言した対象者は、第 7 要素『リストラ反対派』である（表 9）。

『保守』グループのなかには、これらの要素以外に『女性と同じ職場は気をつかう』エピソード、『大手に行きたかった』エピソードも含ま



れる。『大手企業に行きたかった』エピソードを述べた D は、大手新聞社に勤務しており、『保守』グループに布置されながらも、『革新』グループの第 5 要素『肩書きに頼りすぎたら転職』というエピソードについても述べている(表 9)。D は、自分でも大手という会社の肩書きが自分のアイデンティティのようになってしまっていることを自覚しているため、そのことに不安感をいだき、『保守』グループと『革新』グループの両方について発言をしたと考えられる。

### 『人に流される』グループ

『人に流される』グループには、他者の視線を気にするという内容のエピソードが集められ、第 12 要素『人の影響で職業を選択』と、『(仕事の)人間関係がストレス』エピソード、『やめるとまわりに悪い』エピソードが含まれている。

営業職・事務職・経営者・その他より研究職・教育職・医師の方が、親などの影響で職業を選択していることが多い(図 16, 図 17)。医師 L は親の影響で職業を選択しており、「身近で親の仕事をよく見ていた。」と発言している。このように、親の仕事が専門職であった対象者は、親の仕事を見近で見る機会が多かったため、職業選択に親の影響があったのではないかと推察される。

### 第 1 要素『定年後は好きなことを』

最後に、第 1 要素『定年後には好きなことを』についてであるが、この要素のエピソードについて述べた対象者は、『革新』グループと『保守』グループのどちらにも含まれている(表 9)。これらの対象者は、現在、仕事中心の対象者もそうではない対象者もいるがどちらも定年後は仕事中心の生活を送るつもりはない。これは、定年後も仕事中心と思っている対象者は団塊の世代以前に集中しており、団塊の世代以降は、「定年後、仕事はほどほどにしたい、または仕事を

まったくしない」と思っている者が多いという結果(女性財団, 2000)と一致していると言える。

### 最適尺度法による分析

結婚観同様、表 9 にまとめた職業観についての各要素に含まれたエピソードに対する対象者の発言数を最適尺度法を用いて解析し、要素の布置を行った結果を図 18 に示す。横軸を第 1 主成分、縦軸を第 2 主成分とした。固有値はそれぞれ 2.88, 2.58, 寄与率はそれぞれ 23.97%, 21.48% (累積寄与率 45.45%) であった。

各要素の 2 次元布置から、各要素の類似性を検討する。2 つまたは 3 つで構成される群が 3 群できたが、残りの 4 つの要素はどの要素の近くにも布置されなかった。まず、第 1 主成分に高い負の負荷をもち、第 2 主成分に高い正の負荷をもっている第 2 要素『女性の社会進出賛成』と第 3 要素『リストラもしょうがない』そして第 10 要素『やりたいことが決まっている』が近くに布置された。これらは革新的ではあるが、企業にも受け入れられ易い考え方のまとめりと言えよう。次に第 1 主成分に比較的高い正の負荷をもち、第 2 主成分に高い正の負荷をもつ第 8 要素『フリーター反対』と第 9 要素『転職はしない』で構成される群が挙げられる。これらは保守的で企業に受け入れられ易い考えである。さらに第 1 主成分に高い正の負荷をもち、第 2 主成分についてはほとんど負荷をもっていない第 6 要素『人生仕事』、第 7 要素『リストラ反対派』、第 12 要素『人の影響で職業を選択』の群が挙げられる。これらは日本的滅私奉公タイプと考えられる。自分よりも組織全体の和を重んじ、就職時も OB の紹介、就職後も他者に迷惑をかけないように仕事を忠実にこなすというようなかなり保守性の高い考えの集まりと捉えることができよう。

その他、単独に布置されたものがある。まず、第 11 要素『自分のペースで働きたい』が原点付近に布置されている。その他、第 2 主成分に対してのみ高い正の負荷をもっている第 1 要素『定年後は好きなことを』、反対に、比較的高い負の負荷をもっている第 4 要素『フリーランス OK』が挙げられる。また、第 5 要素『転職 OK』は、第 1 主成分と第 2 主成分の負方向に位置している。

以上の結果から、最適尺度法によって抽出された軸について、第 1 主成分は『保守性と革新性』と命名でき、第 2 主成分は『近年の日本企業が求めている姿への適応度』と命名できよう。前述したように、第 1 主成分に高い正の負荷をもっているのは、第 6 要素『人生仕事』、第 7 要素『リストラ反対派』、第 12 要素『人の影響で職業を選択』である。これらはすべて保守的な考え方として捉えることができる。また、第 1 主成分に高い負の負荷をもっているのは、負荷量の高い順に、第 10 要素『やりたいことが決まっている』、第 2 要素『女性の社会進出賛成』、第 3 要素『リストラもしょうがない』、第 5 要素『転職 OK』である。これらはすべて革新的な考え方である。そのため、第 1 主成分を『保守性と革新性』とした。次に第 2 主成分であるが、高い正の負荷をもつ要素は、負荷量の高い順に、第 1 要素『定年後は好きなことを』、第 9 要素『転職はしない』、第 8 要素『フリーター反対』、第 2 要素『女性の社会進出賛成』、第 10 要素『やりたいことが決まっている』、第 3 要素『リストラもしょうがない』であり、比較的高い負の負荷をもつものは、第 4 要素『フリーランス OK』、第 5 要素『転職 OK』である。近年の日本企業では、やりたいことがあったり、定年後は好きな

ことをしても構わないが、教育した者が転職してしまったりすることは好ましくない。またフリーターも好ましくない。男女平等が世界的にも認められているため、企業としても女性の社会進出は認めている。このように第 2 主成分は、近代の日本企業が求めている姿にどの程度適応しているかを示していると考えられる。

### (3)結婚観と仕事観の関係

男性の結婚観と仕事観の関連を検討するため、結婚観と仕事観についての対象者の発言(表 8、表 9)をもとに、それぞれが伝統的であるか非伝統的であるかによって対象者を分類した(表 10)。結婚観においては、伝統的性役割などの保守的考え方を重視している対象者を『伝統的結婚観』のグループ、重視していないと思われる対象者を『非伝統的結婚観』のグループに分類し、伝統的性役割を重視している側面と重視していない側面が混合している対象者を『伝統・非伝統混合の結婚観』のグループに分類した。仕事観では、『保守』グループと『人に流される』グループに含まれている対象者を『伝統的仕事観』のグループに、『革新』グループと『人に流されない』グループに含まれる対象者を『非伝統的仕事観』のグループに、インタビュー内容も考慮した上で分類した。また、『伝統的仕事観』のグループにも、『非伝統的仕事観』のグループにも含まれる発言をしている対象者を『伝統・非伝統混合の仕事観』のグループに分類した。さらに、表 11 には、表 10 の から ごとに対象者の属性を示した。

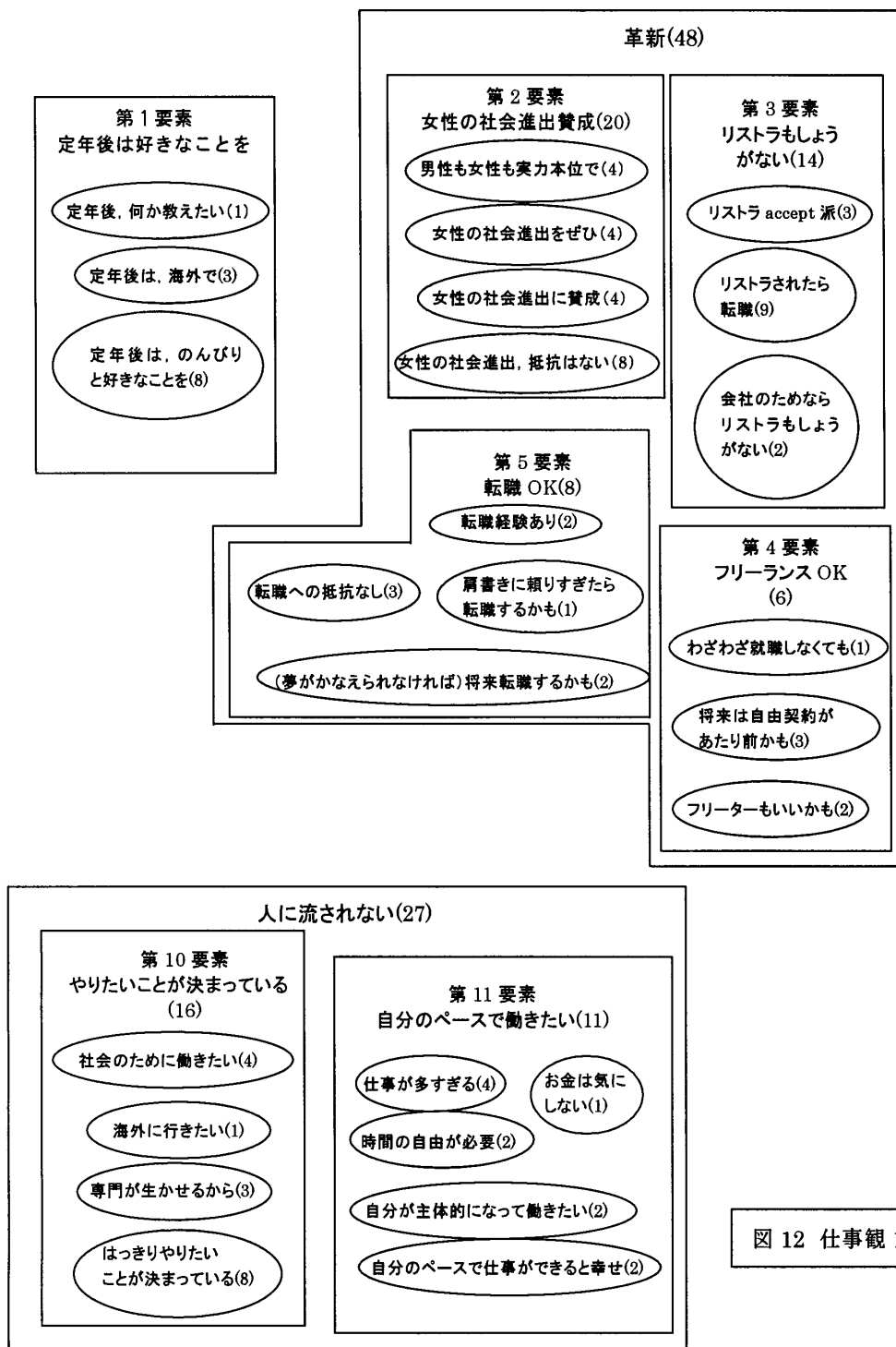


図 12 仕事観 1

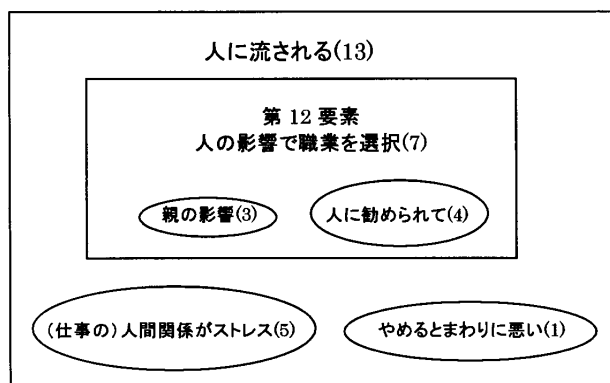
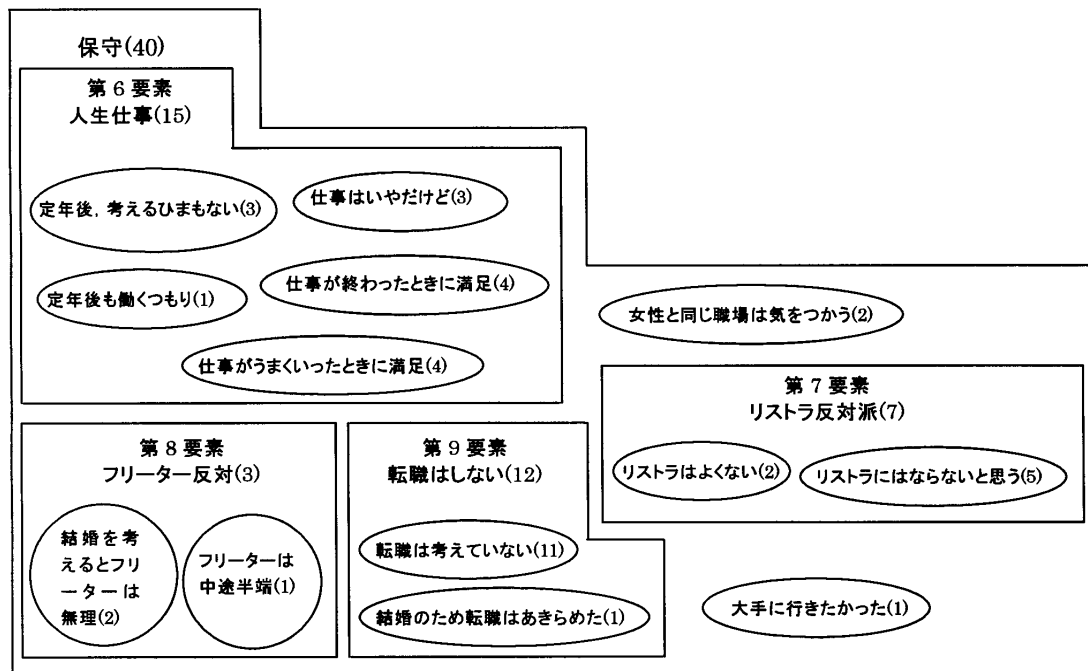
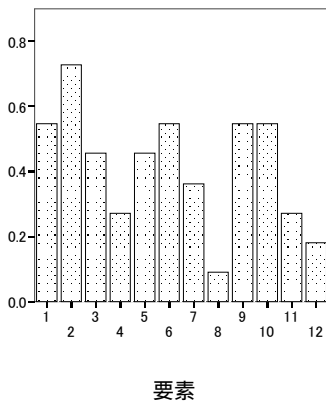


図 13 仕事観 2

表 9 仕事観についての対象者の各要素に含まれるエピソードに対する発言数

要素	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A	1	1	1	0	2	0	0	0	0	1	1	0
B	0	2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1
C	1	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0
D	0	0	1	1	1	3	0	0	1	0	0	0
E	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1
F	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
G	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
H	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	1
I	1	1	0	0	0	1	1	0	1	1	0	0
J	1	2	0	0	0	1	1	0	1	1	0	0
K	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
L	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1
M	1	1	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0
N	1	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0
O	0	2	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0
P	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1
Q	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0
R	0	0	1	0	0	1	1	0	1	0	1	1
S	2	1	1	0	0	1	0	1	2	1	1	1
T	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1
U	2	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
V	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0
W	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0
X	0	1	1	0	0	2	0	1	1	1	0	0
Y	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
合計	12	20	14	6	8	15	7	3	12	16	11	7

エピソードに対する発言数の平均



エピソードに対する発言数の平均

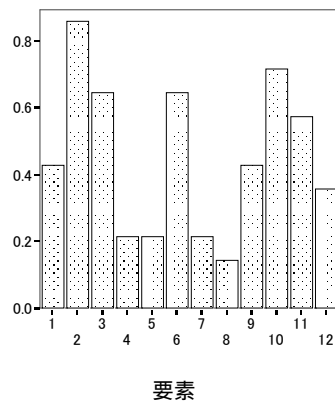


図 14 未婚者の仕事観に関する発言数の平均

図 15 既婚者の仕事観に関する発言数の平均

エピソードに対する発言数の平均

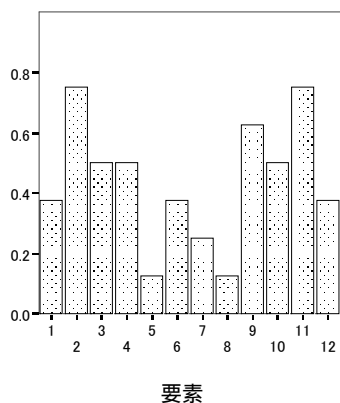


図16 研究職・教育職・医師の仕事観に関する発言数の平均

エピソードに対する発言数の平均

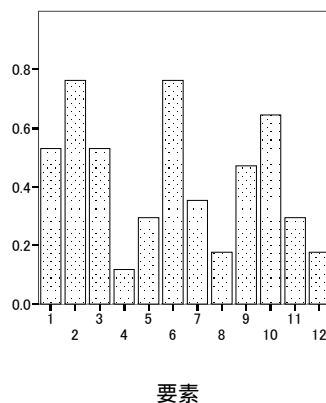


図17 営業職・事務職・経営者・その他の仕事観に関する発言数の平均

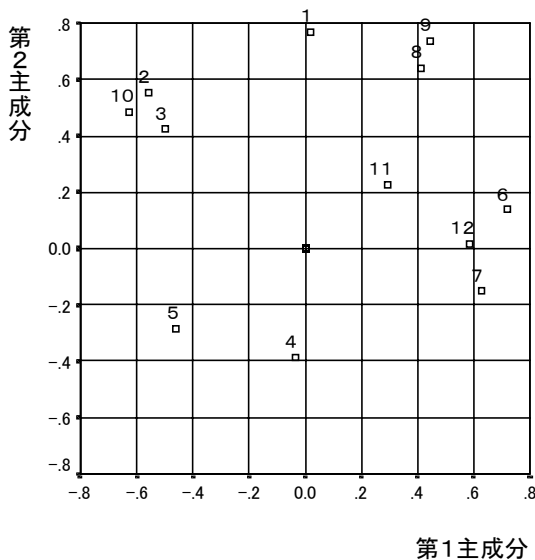


図18 仕事観に関する要素の布置

『伝統的結婚観・伝統的仕事観』のグループの対象者はTのみであった(表10)。望田・大西(1992), 東京商工会議所(1991), 東京女性財団(1998)により, 若い世代の価値観の変化が著しいという結果が示されているように, 若い世代では伝統的な価値観のみをもっている対象者は少ないことが推察される。結婚観についてのみ取り上げてみると, 『伝統的結婚観』をもつ

対象者は5名であった。『伝統的結婚観』をもつ対象者は, 全員, 既婚者であり妻はすべて専業主婦であり子どももいた。また, 企業形態は, 大手企業で勤務している者が多かった(表11)。日本企業では, 企業戦士を支える妻がまだ必要なのではないかと推察される。また, このような日本企業の体質が男性を『伝統的結婚観』に導いているのかもしれない。このことから, 仕

事観が結婚観に影響を与えていることが示唆され、両者に密接な関係があることが推察される。

また、『伝統・非伝統混合の結婚観』と『伝統・非伝統混合の仕事観』をもつ対象者が多いことがわかる。つまり、伝統的考えと非伝統的考えが1人の中に混在し、個人内で意見の整合性があまり取れていないと考えられる。女性の社会進出に賛成しているにもかかわらず、自分の妻は働いてほしくないという対象者がいるように、教育や社会の変動などから非伝統的な結婚観と仕事観を一般論として理解はしていても、自分自身のこととして捉えられていない者が多いことを示唆する結果と言えよう。またこのような整合性のない様子は仕事観よりも結婚観において多く見られた。

『伝統的結婚観』と『伝統的仕事観』を比較すると、『伝統的結婚観』をもつ者は5名、『伝統的仕事観』をもつ者は2名と、『伝統的仕事観』をもつ者が少ない。これは結婚観よりも仕事観の方がより革新的になってきていることを示していると言えよう。その理由としては、仕事観の方が結婚観よりも社会の変動を受けやすいことが考えられる。仕事観は、国際化の流れやリストラなど社会の変動、つまり外的要因に影響され、変わらざるをえない部分が多い。それに対して、結婚観は、内と外ということ考えた場合、内に含まれ、内での様子はなかなか社会の目にさらされることがないため、変化する必然性が生まれにくいのではないと思われる。

このような伝統的結婚観と仕事観をもつ対象者がいる一方で、『非伝統的結婚観・非伝統的仕事観』のグループの対象者も7名いる。彼らの半数以上に転職経験があることから(表11)、彼らは転職に対してあまり抵抗がない様子が示唆される。また、妻の就業形態としては、無職、つ

まり専業主婦は1名と少ない(表11)。『非伝統的結婚観』をもつ男性は、妻が働くことに抵抗がない、または奨励しているのかもしれない。

さらに、『非伝統的結婚観』をもつ対象者の中には、『伝統的仕事観』をもつ対象者や『伝統・非伝統混合』の仕事観をもっている対象者はいない。このことから、仕事の変化が先に起こり、それから結婚観が変化していく過程が示唆される。

結婚観と仕事観はともに変化する場合や、どちらも変化しない場合だけではなく、仕事観など一方のみ変化する場合もあることが示され、結婚観と仕事観の多様化の様相には、違いが認められた。

### 全体的討論および今後の課題

本研究では、現代日本の成人期前期の男性の結婚観と仕事観について検討した。その結果、結婚観についても仕事観についても様々な意見があり、どちらも多様化している実態が示された。また、対象者の中には結婚観と仕事観のどちらも伝統的な者、どちらも非伝統的な者、一方のみ非伝統的な者がいることから、多様化には違いが認められた。

結婚観に関しては、女らしさ以外の価値を女性に求める男性がいること、内田(1994)でも示されたように家事にやりがいを感じる男性がいること、仕事より家庭を重視する非伝統的な結婚観を示す男性がいることが明らかになった。

表 10 対象者の結婚観・仕事観における伝統・非伝統による分類

	伝統的結婚観	伝統・非伝統混合の結婚観	非伝統的結婚観
伝統的仕事観	T	E	
伝統・非伝統混合の仕事観	VWX	BCDHIJLPRS	
非伝統的仕事観	Y	FO	AGKMNQU

表 11 結婚観・仕事観における伝統・非伝統にもとづく対象者の属性

	最終学歴 (対象者)	職業	企業形態	転職 経験	婚姻	妻の 就業形態	子ども 数	最終学歴 (父親)	最終学歴 (母親)
伝統的結婚観 仕事観	大卒 1名	営業職 1名	大手企業 1名	なし 1名	既婚 1名	無職 1名	1人 1名	高卒 1名	高卒 1名
伝統的結婚観 伝統非伝統混合 の仕事観	大卒 2名 院卒 1名	営業職 2名 経営者 1名	大手企業 2名 中小企業 1名	なし 2名 あり 1名	既婚 3名	無職 3名	1人 3名	高卒 2名 大卒 1名	高卒 2名 大卒 1名
伝統的結婚観 非伝統的 仕事観	院卒 1名	研究職 1名	大手企業 1名	なし 1名	既婚 1名	無職 1名	2人 1名	高卒 1名	高卒 1名
伝統非伝統混合 の結婚観 伝統的仕事観	大卒 1名	公務員 1名	役所 1名	なし 1名	未婚 1名			中卒 1名	高卒 1名
伝統非伝統混合 の結婚観 伝統非伝統混合 の仕事観	大卒 4名 院卒 6名	営業職 5名 非常勤講師 1名 大学の助手 1名 医師 1名 研究職 2名	中小企業 1名 大手企業 6名 大学 2名 病院 1名	なし 10名	未婚 6名 既婚 4名	学生 1名 無職 2名 パート 1名		高卒 2名 大卒 7名 院卒 1名	高卒 3名 短大卒 1名 大卒 6名
伝統非伝統混合 の結婚観 非伝統的仕事観	大学中退 1名 院卒 1名	営業職 2名	中小企業 1名 大手企業 1名	なし 1名 あり 1名	未婚 1名 既婚 1名	常勤 1名		高卒 1名 大卒 1名	高卒 1名 短大卒 1名
非伝統的結婚観 仕事観	大卒 6名 院卒 1名	事務職 1名 営業職 3名 研究職 2名 その他 1名	中小企業 3名 大手企業 3名 その他 1名	なし 4名 あり 3名	未婚 3名 既婚 4名	常勤 2名 学生 1名 無職 1名	1人 1名	中卒 1名 高卒 4名 大卒 1名 院卒 1名	中卒 2名 専門卒 1名 高卒 2名 短大卒 1名 大卒 1名



しかし、若い世代であっても伝統的な結婚観はまだ残っており、伝統的な本音と非伝統的な建前が混同したと思われる結婚観をもつ男性も多い。つまり、社会的一般論と自分自身に関わる場合とでは意見が異なるといったように個人内の整合性が取れていない部分があり、結婚観の変化は過渡期的な状況にあることが示唆された。最適尺度法による分析の結果からも、仕事観については『保守性と革新性』と『近代の日本企業が求めている姿への適応度』の2次元の軸を解釈することができたが、結婚観では個人による考え方にばらつきがあり、軸の解釈ができなかったという点からも結婚観が過渡期的な状況にあることが示された。

仕事観については、結婚観に比べ非伝統的になりつつあることが明らかになった。例えば、終身雇用制度の安定や収入の安定以外の価値を求める男性、転職することに抵抗がない男性、女性の社会進出に賛成している男性などがみられ、革新的仕事観が浮かび上がったと言える。これらの結果は、それぞれ、東京商工会議所(1991)、日本労働研究機構(2000)そして労働省(2000)の報告を支持するものである。この事実から男性の仕事観は結婚観よりも社会の変化の影響を受けやすいことも示唆されたと言える。つまり、リストラ、年功序列制と終身雇用制度の崩壊などにより、男性の仕事観は変わらざるを得ないのではないかと考えられる。

結婚観と仕事観の関係については、仕事中心の者は伝統的な結婚観を持つ傾向にあった。仕事中心の者は、妻に家事や育児の全てを任せたいと考え、なるべく仕事に時間を割きたいと思っているようである。これは仕事観が結婚観に影響を及ぼしていたという結果である。これは伝統的な男子ほどキャリア志向であるという森永(1993)の結果を支持するものである。さらに、

「リストラされてもかまわないから、残業はあまりせずに家に帰る。」と述べている者もあり、逆に結婚観が仕事観に影響を与えている例も見られた。

また、仕事観や結婚観にかかわらず、仕事と家庭の両立に追い詰められている男性の姿も浮かび上がった。リストラの可能性があり、自分のペースで働くことが難しく、妻や家庭も大切にしようとする自分の時間をもつことができない。このような状況で家庭に対しても職場に対してもストレスを感じている者も少なくなかった。これは、矢澤(2000)の「家族志向」の父親のストレスは自分の時間や家族と過ごす時間の少なさであるという結果を支持するものであると言える。

本研究では小標本により探索的に成人期前期の男性の結婚観と仕事観を検討した。今後は、本研究をもとに、成人期前期の男性の結婚観と仕事観を測定する尺度を作成し、大標本による調査を行っていく予定である。

## 引用文献

- 東洋・柏木恵子(編). (1999). *社会と家族の心理学 流動する社会と家族I*. ミネルヴァ書房.
- Beutell, N. J., & Brenner, O. C. (1986). Sex differences in work values. *Journal of Vocational Behavior*, **28**, 29-41.
- レヴィンソン, D.J. 南博(訳). (1980). *人生の四季 中年をいかに生きるか*. 講談社.
- 藤生京子. (1997). 定年後夫婦の幸福な生き方. *朝日新聞 WEEKLY AERA*, **11**, 6-9.
- 海老坂武. (1986). *シングル・ライフ*. 中央公論社.

- 海老坂武. (2000). *新・シングルライフ*. 集英社.
- 伊藤公雄. (1993). <男らしさ>のゆくえ *男性文化の文化社会学*. 新曜社.
- 伊藤公雄. (1996). *男性学入門*. 作品社.
- 柏木恵子(編). (1998). *結婚・家族の心理学 家族の発達・個人の発達*. ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子・永久ひさ子. (1999). 女性における子どもの価値 今,なぜ子どもを産むか. *教育心理学研究*, 47, 170-179.
- 鹿嶋敬. (1993). *男の座標軸 企業から家庭・社会へ*. 岩波書店.
- 川喜田二郎. (1970). *続・発想法 KJ法の展開と応用*. 中央公論新社.
- 望田幸男・大西広. (1992). *ゆらぐ大人 = 男性社会*. 有斐閣.
- 森永康子. (1993). 男女大学生の仕事に関する価値観. *社会心理学研究*, 9, 97-104.
- 森永康子. (1997). 大卒・短大卒女性の仕事に関する価値観. *教育心理学研究*, 45, 166-172.
- 中村彰. (1994). *わたしの男性学 「人生相談」にみるイエ意識*. 近代文藝社.
- 難波淳子. (1999). 中年期の日本人夫婦のコミュニケーションの特徴についての一考察 事例の分析を通して. *岡山大学大学院文化科学研究科紀要*, 8, 69-85.
- 日本労働研究機構. (2000). 調査研究報告書 No.136 フリーターの意識と実態 97人へのヒアリング結果より.
- 西川裕子・荻野美穂(編). (1999). *男性論*. 人文書院.
- 労働省(編). (2000). *平成12年版労働白書 高齢社会の下での若者と中高年のベストミックス*. 日本労働研究機構.
- 盛山和夫(編). (2000). *日本の階層システム 4 ジェンダー・市場・家族*. 東京大学出版会.
- 壽里茂・北澤裕・桜井洋(編). (1996). *ライフスタイルと社会構造*. 日本評論社.
- 鈴木隆之(編). (2000). *木野評論31 頑張らない派宣言*. 京都精華大学 情報館.
- 竹田さをり. (2000). 30代男の結婚ドタキャン. *朝日新聞 WEEKLY AERA*, 42, 38-41.
- 東京女性財団. (1998). *男性の自立とその条件をめぐる研究 団塊世代を中心に*.
- 東京商工会議所. (1991). *若者の価値観変化と企業コミュニケーション戦略*.
- 東京都立労働研究所. (1999). 労働時間管理の多様化に関する実態調査. *労政時報*, 3422.
- 内田哲郎. (1994). 家事を分担する夫たち 家事及び性役割に対する意識. *家族研究年報*, 19, 58-69.
- Walker, J. E., Tausky, C., & Oliver, D. (1982). Men and women at work: Similarities and differences in work values within occupational groupings. *Journal of Vocational Behavior*, 21, 17-36.
- 矢澤澄子. (2000). 若い父親の社会参加と子育て意識についての研究. *女性学研究所年報*, 10, 6-8.

< 付記 >

本論文の作成にあたり、御指導いただきました、白百合女子大学林洋一教授に心より感謝いたします。

- 鹿嶋敬. (2000). 男女摩擦. 岩波新書.
- Machung, A. (1989). *Taking career, thinking job: Gender differences in career and family expectations of Berkeley seniors. Feminist Studies, 15, 35-58.*
- 森永康子. (1991). 女子短期大学生の勤労意識に関する研究. 女性学年報, 12, 124-129.
- Murrell, A. J., Frieze, I. H. & Frost, J. L. (1991). *Aspiring to careers in male-and female-dominated professions. Psychology of Woman Quarterly, 15, 103-126.*
- 関井友子. (1989). 「男性性」に関する実証的研究 - 性別役割分業観と自己評価意識において - . 家族研究年報, 15, 65-83.
- 矢野眞和(編). (1995). 生活時間の社会学 社会の時間・個人の時間 . 東京大学出版会.

< 付 記 >

本論文の作成にあたり，御指導いただきました，白百合女子大学 林洋一教授に心より感謝いたします。

